

振興トピックス

このコーナーでは、主に電源地域の地域活性化に向けたソフト事業の話題を取り上げています。今回は福島県広野町での催し、青森県下北地域、島根県松江市の取り組み、福島県相双地方Passion物産展の様相を紹介します。



10数ヶ国の約2000人が参加した 国際フォーラムが開催される

福島県広野町 地図 A

平成28年11月25日(金)から27日(日)まで、3日間にわたって福島県広野町をメイン会場にした「国際フォーラム・被災地から考える」が開催されました。日本や米国、フランス、ドイツ、スペイン、ベトナムなど10数ヶ国から約2000人が参加して、被災地の課題を共有し、復興のあり方などについて討議されました。

25日は、開会式に続き、オープニングセッション「世界におけるフクシマ」が開かれました。このセッションでは、各国の大使館員や有識者による、本国におけるフクシマの発表を通じて、今後、どのような取り組みを行うことが、より良い相互理解につながるかが話し合われました。また、同日の高校生による演劇パフォーマンスでは、ふたば未来学園高校の1年生11人が、被災地の課題を題材にした演劇を上演し、自らが先頭に立って動くという力強いメッセージを発信しました。

さらに、「海外専門家との個別対話からの本音」と題された公開討論では、インドネシアやスリランカの研究者が、2015年に行われた仮設住宅の住民との対話の内容を報告しました。この中で、「帰還にあたって、仮設住宅での生活を通じ生まれたコミュニティが無くなってしまふことに不安を感じて

いる」といった住民の本音が報告されました。こうした報告を通して、被災地の現状にかかわる様々な意見が交わされました。26日には、福島県浜通りの高校生が、今夏にベラルーシのチエルノブイリを訪問して学んだ「日本ベラルーシ友好訪問団2016」の成果報告が行われました。その他に、いわき市在住の外国人青年たちとの交流や、いかに福島と海外をつなぐかという視点で、通訳案内士の発表



(上)開会式の模様
(下)オープニングセッション

の対話の内容を報告しました。この中で、「帰還にあたって、仮設住宅での生活を通じ生まれたコミュニティが無くなってしまふことに不安を感じて

地域の取り組みが実を結び 「下北ジオパーク」認定へ

青森県下北地域 地図 B

青森県下北半島のむつ市、大間町、東通村、風間浦村、佐井村の5市町村をエリアとする「下北ジオパーク」が、9月9日に新たに「日本ジオパーク」に認定されました。

「ジオパーク」とは、「地球・大地(ジオ・Geo)」と「公園(パーク・Park)」とを組み合わせた言葉で、「大地の公園」を意味します。美しい自然景観を意味します。美しい自然景観や学術的価値を持つ自然遺産、それらと深くかかわりのある歴史や文化も対象になります。本州最北に位置する「下北ジオパーク」は、「海と生きる『まさかり』の大地」本州最北の地

に守り継がれる文化と信仰」をテーマとしています。地質や文化・歴史を感じることができるところは「ジオサイト」と呼ばれ、恐山や仏ヶ浦、大間崎、尻屋崎など16か所のジオサイトでは、特徴的な地形・地質などの自然環境だけではなく、そのなかで育まれてきた生態系や歴史・文化・産業なども紹介されています。実は、下北ジオパークは2度目の申請で認定に至っています。下北地域には地球科学的な特徴や自然環境が残っており、それを反映した文化・信仰が残る地域ではありましたが、ジオパー



ふたば未来学園高校の1年生による演劇パフォーマンス

がありました。27日には、農地や環境の再生、子育て、伝統行事の再生などについても意見交換が行われました。

クに対する住民意識が低く、住民活動も希薄であるなどの理由で認定見送りとなっていました。見送り後、地域住民の意識を高



(上) 仏ヶ浦ジオサイト (下) 脇野沢・鯛島ジオサイトを望む公園清掃

め、活動を活性化させるべく、講演会の開催や出前講座を実施。また、学校教育にもジオパークを取り入れ、ジオパークの基本的考えの普及を行ってきました。さらに、市町村や研究機関、民間団体で組織する推進協議会メンバーによる担当者会議を毎月開催するなど、住民に

よるボトムアップ型推進体制の構築に努めてきました。

その結果、地域の機運が高まり、住民主導による地域資源の保全と観光・教育への活用が進んだことから、ジオパークの認定に至りました。

「北北ジオパーク」は日本ジオパークへの認定にとどまらず、世界ジオパークへの認定も目指しています。ジオパークへの認定を機に、今後ますますの地域振興と地域教育の促進、それに伴う地域交流人口拡大と郷土愛の醸成が期待されています。

「Passion物産展」を東京都中央区で開催

福島県相双地方
地図

相双地方の特産品をPRする「福島県相双地方Passion物産展」が「日本橋ふくしま館（東京都中央区）」で開催されました。

物産展では、品評会で2年ぶりに3回目の金賞を受賞した醤油（相馬市）や、ご当地グルメの最高峰『なみえ焼きそば』（浪江町）、清らかな水で育った、いわなのブランド『あぶくま川内』（川内村）、最新の農法で育てた

トマトをはじめとした農産物や、その加工品（新地町）など、おいしい食べ物が盛りだくさんの品揃えとなりました。また、南相馬市の職人が丁寧手作りしているガラスアクセサリーや、大熊町民がひとつひとつ絵付けをしている『おおちゃん興き上がり小坊師』などが、訪れた人々の人気となりました。

復興に向けて相双地方の食の魅力と安全を発信するという、事業者の勢いを感じさせる物産展となりました。

食を通じて地域を見直す「食の縁結び甲子園」をしまねで開催

島根県松江市
地図

第1回「食の縁結び甲子園」全国大会が、平成28年11月12日（土）、島根県松江市で開催されました。これは、「縁結びの地」しまね」で開催する高校生を対象とした料理コンテストです。



料理コンテスト

全国各地の食材と島根県産の食材を組み合わせたメニュー開発や料理コンテストを通じた参加者同士の交流から、高校生のコミュニケーション能力、地域理解と貢献意欲を育てることを目的とした取り組みとなっています。

料理のテーマは「地域を元気にする」お米を使った縁結びランチ。島根を代表する食材である和牛肉、しいたけ、しじみから1品以上選択し、出場チームのPRしたい地元食材を組み合わせたメニューを考案・調理

しました。さらに、料理をPRするプレゼンテーションと合わせて、総合審査により優勝校を決定します。

島根県予選を勝ち抜いた松江農林高等学校、松江養護学校に加え、全国7地域からの8チーム、合計10チームが、オリジナルメニューで競いました。

第1回大会で優勝に輝いたのは三笠高等学校（北海道三笠市）のチームで、島根県産の和牛を



観光案内のようす

三笠ワインで煮込むなどのアイデアが評価されました。準優勝には、葛飾ろう学校（東京都）と湯本高等学校（福島県）が輝きました。

翌日は、出場した全国各地の高校生をもてな

すために、観光の授業に力を入れる松江立女子高等学校の生徒が案内役となり、出雲大社や玉造温泉街といった、しまねの観光地の見どころを女子高生の視点で紹介しました。

(左・下) 物産展のようす

